

2004年度 「特色ある大学教育支援プログラム」(GP)に 同志社大学の教育支援プロジェクト採択される

1. 特色ある大学教育支援プログラム」(Good Practice) に本学プロジェクト採択

2004年7月30日、文部科学省の「平成16年度 特色ある大学教育支援プログラム」(Good Practice 以下GP)の審査の結果、第4テーマに応募した同志社大学の『大学コミュニティーの創造 - コミュニケーション・デバイドの克服 -』プロジェクトが採択、本学の学生支援の取り組みが高く評価されました。

「GP」とは、文部科学省が進める教育改革のひとつで、<特色ある優れた取組や継続的な成果をあげている取組>を積極的に採択、全国の大学に対する導入モデルとしようというものです。今年は5つのテーマで募集があり、国公立大学から534件の応募があり、第4テーマの「主として学生の学習及び課外活動への支援の工夫改善に関するテーマ」では応募数49件、本学を含めて5件の取り組みが採択されました。

2. 大学生の新たな課題 - 「コミュニケーション・デバイド」

近年、大学における学生の大きな課題として、学内外での人間関係の希薄化が生む精神的成熟の不足、また一定の閉じられた人間関係のなかに安住して新たな人間関係を求めないなどの問題があります。

本来、大学生活を通して多様・多彩な人間関係、社会活動を経験するなかで、驚き、喜び、不安、葛藤、悲しみを自己の内面に血肉化されることで、18歳以降の人格の形成、成長が自覚されていく過程を辿りますが、学生間、また社会とのあいだのコミュニティ形成の経験が希薄となるなかで、自己決定力の弱体化、他者への思いやり、協働性への意思力などの内面化・血肉化も、また希薄傾向にあります。

本学では、このような状況を「コミュニケーション・デバイド」状況、すなわち、あるグループに所属することによって、そのグループ内でのコミュニケーションはスムーズに進むものの、他のグループとの間のコミュニケーションがうまく行かず、楽しい仲間うちとの付き合いの一方で、せつかくの成長機会を逸していくという状況として認識し、かつその認識の上に立って「インキュベイト」「共存・交流」「成長・拡がり」という3つのプロセスを経て、学生の「自律的成長」を促すことを目的としたプロジェクトを立ちあげてまいりました。

3. 「コミュニケーション・デバイド」克服のための仕組み - 学生支援センター

そのような現代の大学生が共通的に抱える課題を克服していくことに焦点を当てて取り組んでいる本学の活動こそ、今回のGPで採択された『大学コミュニティの創造 - コミュニケーション・デバイドの克服 -』プロジェクトです。

プロジェクトの最初のステップが、大学入学時から、一人一人の学生の自立、社会的活動への関心・意欲を喚起するための新たな仕組み（組織）の創設、2002年度、従来の学生関連組織である「学生部」とは独立して新設された「学生支援センター」です。

コンセプトは「ワンストップサービス」。＜大学生生活何でも相談＞できる窓口としての柔軟な機能をもつこの「センター」は、学内外で、学生個人のニーズやデマンドを取り込みながら、バラエティに富んだ行事・活動を展開、2004年、これまでの「学生部」をいわば吸収するかたちで、2004年4月、新「学生支援センター」として改組再編されるに至りました。

とりわけ1、2年次生が学ぶ京田辺校地における新「学生支援センター」では、これまでの「学生部」機能に加え、「キャリアセンター」「国際センター」の出先オフィスを併設、総合的な学生支援サービスの連携を強化して、学生ニーズに対して「リアルタイム」な「ワンストップ」で処理しています。

4. 「コミュニケーション・デバイド」克服のための3つの取り組み

「コミュニケーション・デバイド」を克服するために、3つの領域での取り組みを行っています。

- 1) 一般学生に対する「啓発支援活動」
- 2) 障がい学生に対する「障がい支援活動」
- 3) 留学生に対する「異文化交流促進活動」

1) 「啓発支援活動」

前記の＜ワンストップサービス＞のコンセプトを軸にした「何でも相談」を入り口として、学生と相談員のFace to Faceの信頼関係の構築、そこから学生のニーズ、デマンドを基礎に、たとえば「エンパワーメントプログラム」などを展開しています。これは、自分の持っている潜在能力を引き出し、更なる主体性を引き出すことを狙いとする試みです。数日間、人里離れた自然の中で、寝食を共にしながら学生を精神的にも肉体的にも追い込み必死に何かを成し遂げることを意味を体験させます。また新入生に対する「ファーストイヤーキャンプ」や、新島襄の日本出国の地を訪問する「函館キャンプ」など、「学生支援センター」の企画に参加して目覚めた学生が翌年以降、後輩の面倒を見るために再び参加するという「学生が学生を巻き込む」プログラムです。これらの活動を促進するため既存の学内広報とは別に、＜自己啓発＞に特化した情報紙「S-cube Net」を毎月発行、プログラム内容は、インターネットによるビデオのストーリーミング配信も行います。

2)「障がい学生支援制度」

本学ならではの従来の手厚い障がい学生への教育支援の取り組みとは別に、本プロジェクトでは、障がい学生はもとよりむしろ健常学生の教育効果に力点を置いています。「学生が学生を巻き込む」という視点から、ガイドヘルプ、パソコン通訳、手話など支援スキルの習得のための講習会、さらに障がい学生、支援学生、大学の三者の定期的な懇談会を通して、障がい学生に対するサポート体制の充実を行っています。

3)「異文化交流促進活動」

留学生と接する日本人学生によって、留学生の生活支援、ネットワーク作りを中心とする活動「国際交流合宿」や「留学生委員会」を通して、留学生と日本人学生との間の密接な交流を促進しています。

5 . おわりに

学生の自律的成長を促し、その成果を再びコミュニティーに還元させるために、随所に、「学生が学生を巻き込む」仕組みを設けて、<支えられる側>の学生はもちろん、<支える側>の学生の教育効果を重視した、これまでにない多様、多彩な意欲的な試みであること。これこそが今回の採択に至った最大のポイントであると自負致しております。

同志社の創立者新島襄は、常に教職員たちに『学生を丁重に扱いなさい』『学生の個性を伸ばしてあげなさい』と説きました。

本学は2005年、創立130年を迎えますが、その精神は今もすべての教職員たちに共有されています。この新島スピリットこそが、改革を進める同志社大学の大きな柱であり、強みであります。

今後の展開と成果に是非ご注目いただき、ご支援をお願い申し上げます。

以 上